

ソニーによるトランジスター製造技術の導入

ソニー広報センター『ソニー自叙伝』ワック株式会社、1998年より。参照 ⇒ [ソニーヒストリー](#)

1946年5月7日「東京通信工業」設立。資本金19万円、社員数20数名。井深大38歳、盛田昭夫25歳。岳父で前文部大臣の前田多門が社長、帝国銀行会長など大物5人が役員。写=山の上工場

1948年 米国で発明された点接触型トランジスターの写真を見た井深は、将来性がないと判断。

1950年 国産初のテープレコーダー「G型」を16万円で発売。

1952年3月 井深が初渡米(3か月)。テープレコーダーの販売拡大のため。WE (Western Electric) 社がトランジスターの製造特許を有償公開するという情報を得る。特許使用料は25000ドル(約900万円)。このときゲルマニウム・ダイオードを持ち帰る。

WE社から、製造特許の使用を許諾する用意があるとの手紙が来る。

1953年 社内でショックレー著『エレクトロン・アンド・ホールズ』を輪読、和訳。

1953年8月 盛田が渡米。

WE社と仮調印。通産省の許可がまだ下りていなかった。WEは補聴器への応用を勧めた。写
ベル研究所の『トランジスター・テクノロジー』などの資料、ダイヤモンド砥石(ゲルマニウム切断機のため)などを持ち帰る。

井深がトランジスターラジオの製作を決意。

1953年12月 通産省の許可が下りるとの知らせが来る。

[トランジスターの製造特許の使用権を取得。1954年2月から10年間]

1954年1-3月 テープレコーダーの製造部長だった岩間和夫がWE社のトランジスター工場を見学し、「岩間レポート」(7本48枚)を送る。WEの工場では質問はできるが、装置の図面をノートに書くことはできず。写

製造装置を内製、設計図はない

- 酸化ゲルマニウム還元装置、ゾーン精製装置、ゲルマニウム切断機
- 結晶引き上げ機を『トランジスター・テクノロジー』の写真をもとに内製。
- ラッピング機は、WE社が使っていたラップマスター(70万円)のカタログをみて内製。

1954年4月 点接触型トランジスター、接合型トランジスターの試作に成功。成長型トランジスターをめざす。写

三井銀行に融資を求める。五反田支店ではトランジスターが何かわからず、本店の審査部をソニーが説得する。

1954年6月 トランジスターラジオの試作を開始

1954年12月 米I.D.E.A.社がリージェンシー TR-1を発売。世界初のトランジスターラジオ。ただしトランジスターはテキサス・インスツルメンツ社製。

1955年1月 トランジスターラジオ TR-52を試作。外装のプラスチックの歪みにより発売を断念。写

1955年 対米輸出用の TR-52 に SONY という英語の名前を付ける。
ラテン語の sonus(英語の sound の語原)と sonny(坊や)を掛け合わせた。

1955年8月 TR-55を発売。日本初のトランジスターラジオ。トランジスターの歩留まりは1%。写

1957年 東北や北海道から「トランジスター娘」を採用。寮も建設。写=TR-6製造ライン

1957年 世界最小のトランジスターラジオ TR-63を1万3800円で発売。米国に輸出して(39.95ドル)大成功する。

1958年1月 社名を「ソニー株式会社」に変更

参照→ 井深大談 in video / 更新日:2024年7月9日